

里山保全セミナー記録

日 時：12月17日（金）13：30～16：00

場 所：ATCビル ITM棟 11F セミナールーム

【話題提供】

「大阪の里山保全活動の現在・未来を考える ―持続可能な社会づくりの視点から―」

畑中直樹氏 （大阪さともり地域協議会委員、大阪大学大学院工学研究科 招聘教員）

○自己紹介

現在は大阪万博の際に会場計画を行った京都大学の研究室からスピンアウトした民間のシンクタンクの仕事をメインに、大学の教員やNPOの役員、行政の委員などをしています。

福岡の、海の中道の近くで育ちました。昔から自然の豊かなところで、玄界灘と博多湾を望み、カブトガニが泳いでいましたが、高度成長期でニュータウン化が進み、遊んでいた場所がなくなっていく中、環境の大切さを感じ、環境工学に進みました。



○里山の保全から、材を街なかで使うしくみづくりまで

これまで携わった里山関連の活動のひとつに加古川の「里山ギフチョウネット」があります。山陽自動車道ができる際、ルートがギフチョウの生息地を通るということで相談を受け、地元の方や研究者の方たちとともに会を発足。その際、ギフチョウだけでなく里山全体を守ろうと、会の名前に「里山」を入れました。春先には毎週末、きれいなギフチョウのいる里山に通い、エメラルドグリーンの卵や幼虫などの調査、管理を行ないました。数年前にシンポジウムを開くなど、20年以上にわたる活動は現在も地元の方の手で続いています。上山高原エコミュージアムにもアドバイザーとして20年かかわっています。ここは時には5メートルも積もる豪雪地帯ですが、もとは但馬牛を飼育する高原地域で草原が維持され、草原性のイヌワシも訪れていました。しかし放牧をやめた今、草原が森になり、イヌワシも兵庫県内で2つがいが残るだけになりました。そこで地域振興のためにブナの森や滝などを活用しようと、20年前に地域の人とNPOを立ち上げました。木を伐採し、地元のブナの種から育てた苗を植えました。さらに40ヘクタールほどの草原に火入れをし、牛の放牧も始めました。少しずつ新規伐採し開墾も進めています。最近、いい茅（カヤ）の草原もできてきました。昨今、茅葺きを必要とする歴史的建造物も結構多く、茅の消費量も増加しています。神戸には「くさかんむり」という茅葺き職人集団がいて、若手職人も増えているほどです。しかしもともと茅というのは地産地消のマテリアルで、地域にはそれぞれ自分たちが使うための茅場があったはずなのに、今は唯一量産している阿蘇や御殿場から買うしかない。そこで今、兵庫県内で連携して茅を育て、1束800円ほどで出荷しています。

このように、自然再生をお金に繋げることもやっています。湖東地域材循環システム協議会 *kitokitō* では、地域の材を使おうと木の駅のようなことをやり、年間200tくらいの材木が集まっています。これを紙にしたり、彦根の伝統工芸品である仏壇の職人さんが小物を作ったり。CO₂ 吸収固定認証も行なっています。また、岸和田の丘陵地区では、数年前から竹を買い取り使用する仕組みの事業化に向けて動いています。白浜のアドベンチャーワールドと連携し、パンダの餌用に竹の利用を進めたりしています。この他、兵庫県の

林業会館、岸和田の海岸貯木場に浮かべていた木製のソーラーパネル、関西大学との協同による街中に木陰を作るスマートアンブレラというプロジェクトなど、材を街なかで使うしくみを作ろうとさまざまなプロジェクトに取り組んでいます。

○気候危機を回避するには、これからの10年間で大切

本日、お伝えしたいのは、まず気候危機についてです。これは里山にも大きな影響が出る、避けて通れない問題です。ケリー氏が「環境問題ではなく環境危機だ」と言うように、ペルシャ湾岸では今後50℃を越え、生存限界を超えて人が住めなくなる。そうするとみんなが難民になり、反感を持つ若者がテロリストに走る、つまり安全保障問題でもあるのです。実際、異常気象は気象庁のデータで見ても、2018年から2020年にかけて圧倒的に増えています。梅原猛氏も述べていますが、第一次環境破壊では人間が森林を破壊し尽くしました。これでイタリア半島やイースター島などいろいろな文明が滅びています。近代に入ると人間は地下資源、化石エネルギーを使い尽くしています。国内でも、出雲のたたら製鉄などがひどいことになった。こうしたパターンで人間は過ちを繰り返し、文明が減ってきました。木材などの資源を消費し過ぎると大雨で洪水が発生し、湿地となって疫病が流行して文明が減る。日本でも、禿山になっていた六甲山で、明治時代に国営の治山事業で森林再生が進められましたが、阪神大水害が起きました。今、似たようなことが地球規模で起きているので、なんとか止めなければいけません。今、高知大学などと共同で、気候変動によって植生がどう変化するかについて調べていますが、今世紀末には中国地方、四国地方にある亜高山帯針葉樹林やブナなどの森がなくなる。里山を含めて植生自体が変わってしまうことがわかってきました。

先日COP26がありました、今後は気温上昇を1.5℃に抑えるなど、かなり大きく軌道修正をしていく必要があります。日本も2050年にカーボンニュートラルなどと言っていますが、ここで皆さんに認識していただきたいのが、実は2030年までの10年間でポイントだということなのです。そもそも産業革命以降、気温の上昇というのは、人類が人為的に排出した温室効果ガスの総量によって濃度が決まり、濃度で温度上昇が決まります。つまりプラス1.5℃の濃度に安定させるために今後出せる温室効果ガスの総量が決まってくる。この量を、今年一年間に世界中が出している量で割ると、実は8年分しかないんです。これを超えると手遅れになるということです。だから2050年と言わず、2030年までの10年間で残されたバジェットを使い切るペースを急激に落さなければなりません。この10年が勝負なのです。

国の研究機関が予測するエネルギー消費のグラフを見てみましょう。2050年には日本のエネルギー消費量をまず半分に落とし、さらに再生可能エネルギーでまかなうことで、何とか生き長らえられる。日本はいろいろな産業や技術でまかなっている国です。だからなるべくエネルギーは産業部門に回し、家庭や業務、運輸はほとんどエネルギーを使わない形にしないとダメだと予測しています。

そんな中、経済界で見られる動きが「サーキュラーエコノミー」です。ハーマン・デイリーという経済学者が提唱した持続可能な発展のための3原則をベースにしています。いわゆる枯渇性資源をなるべく使わず、再生可能資源だけで経済や社会を回していくというもので、

竹林の保全・活用(岸和田市)

岸和田市民・貝塚市民限定
6円/kg 税別で竹買い取ります!
 本日は岸和田市で、竹の資源を有効活用し、竹の活用を促進するため、竹の買い取りを行います。
 竹の活用は、環境保全や防災対策などに有効です。竹の活用を促進するため、竹の買い取りを行います。
 竹の活用は、環境保全や防災対策などに有効です。竹の活用を促進するため、竹の買い取りを行います。
 竹の活用は、環境保全や防災対策などに有効です。竹の活用を促進するため、竹の買い取りを行います。

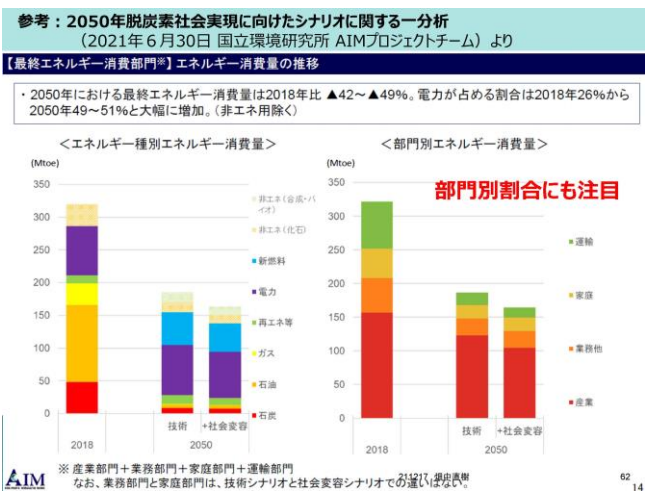
日	2018.7/6(金)	2018.7/7(土)
時	10時~16時	10時~16時

近畿職業能力大学校 駐車場
 〒655-0817 大阪府岸和田市南町1丁目1番1号(近畿職業能力大学校)

お問い合わせ・事務局
 岸和田市もつり環境部庶務課
 TEL: 072-423-9601(直通) 担当: 渡辺

主催: 岸和田市もつり環境部庶務課
 協賛: 岸和田市もつり環境部庶務課 (アムツボ)

211217 塚中道廣



ヨーロッパなどではこちらにシフトしています。例えば石油資源を用いて作られるプラスチックはなくしていいこと。そうすると「森林資源などのバイオマスでやればいい」という声が上がりますが、それが危険なのです。私はよく「寅さん」の映画を見ますが、そこは1960年代の日本の姿が映し出されています。プラスチック製品はあまりなく、室内にあるものはたいてい木でできた製品です。そういう状態に戻していかなければならないと思っています。

よく、「我々はSDGsにのっかって、これとこれをやっています」と4つや5つの目標を表示されているケースがありますよね。あれも間違いではないのですが、私はSDGsにおいて大切なポイントが2つあると思っています。1つは「誰一人取り残さない」という前文です。貧困層や子ども食堂がニュースになったりしますが、何か社会の取り組みをするとき、どこかに取り残されている人がいるのではないかと意識する。例えば温暖化対策で省エネ機器に変えればいいといっても、お金がない人はどうするのか、と。脆弱な領域の方がいないかどうかを気にすることが大切です。もうひとつも前文にちゃんと書かれています、17のゴールは「統合不可分」であるということです。食費ロスも貧困、教育、廃棄物、資源も、個別に捉えずになるべく繋げてトータルに考えるということ覚えておいてください。

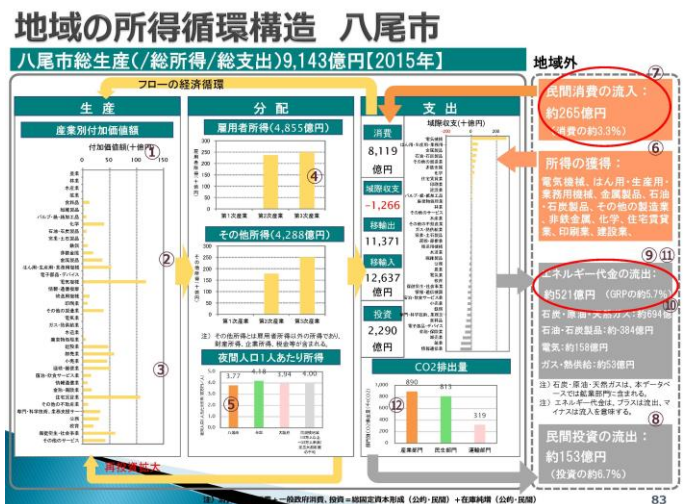
○地域内で経済を循環させて、持続可能に

もうひとつ、お伝えしたいのが地域内循環についてです。地域というのはもともとお金に関係ない非経済的な部分がありますよね、自給だったりお祭りのコミュニティだったり。大阪の都市部などはそうではないかもしれませんが、例えば但馬のような地域へいくと、集落のことや祭などもボランティアで行い、食料は自給に近い。そこに加えて、地域の中と外でまわっている必要最低限の売り買いがあるわけです。但馬の場合は、炭を京都などに売ったり、但馬杜氏で現金を少しだけ稼いできました。それが今、地方に何が起きているかということ、モールが出店し、家族で便利だと喜んで訪れている。でもあれはひたすらお金を外に吸い出すしくみなんです。地元の商店がぼろぼろになり、そこで働けなくなります。いくら商品を安く買っても、売り上げは地域外に出て行く。だから地域にあった商業や付帯するサービスがどんどんなくなり、人口が減ってマーケット自体が消滅し、結局最後はモールも撤退します。これはビジネスモデルとしては最悪です。適正価格で、なるべく地域内でお金を回すほうが地域は持続するんです。さすがにショッピングモール側も持続可能なビジネスモデルではないことに気づき、いろいろな作戦を考え始めているようですが、一般的にはそういう状況になっています。

日本では、地域のGRPの5~10%は非再生可能エネルギー代金として最終的には中東などに流出していくことになります。それを再生可能エネルギーに変えることで馬鹿にならないお金が地域内で回り、地域が存続するための雇用ができるのです。そういった消費のためのお金が地域からどれくらい出たり入ったりするのかバランスがわかるように環境省が作ったのがこの資料です。

これは八尾と岸和田です。衛星都市はたいてい消費支出が外へ出ていくのですが、地域内循環を頑張っている特殊なケースです。私は、持続可能な環境・経済・社会の地域の規模は、小学校校区くらいが適度な規模だと考えています。ヨーロッパを見ると1800人くらいのコミュニティが行政の最小単位となっているようです。

2年前に南ドイツ、スイス、北イタリアの林業を視察に行きました。向こうにはフォレスターという公務員の身分の人がいて、1人1000~2000ヘクタールくらいの森をマネジメントしています。山を持っている農家に、この時期には何をすればいいか、とい



ったアドバイスをしているそうです。この時に驚いたのが、ドイツでは適正価格で取引がされているかどうかを公正取引委員会が監督しているということです。伐採にこれだけの費用がかかるので最低でもこれくらいは支払ってください、と。翻って日本では大手ハウスメーカーが材を大量に買い叩き、結局山にお金は落ちない。今は再造林も難しい単価になっています。日本社会は、明治維新以降、大企業の下に小さな会社がぶら下がるピラミッド型の構造で、利益は一番上が取ってしまう。これは大きな問題だと思います。一方、ヨーロッパ、特に地方では分散型で、経済活動のあらゆる場面で利益配分がきちんとなされています。

地域循環という点でいうと、地方都市のレストランは値段が高いのに地元の方はそこで普通に食べています。マルシェも高いけれど、そんなもんだと買っている。地域でお金や食料などの資源がまわり、地域経済が安定しているんです。でも自分とは言う、ついファストフードに行ってしまう。これではダメだと反省しました。日本は「いいものをより安く」で突っ走ってききましたが、その代償として社会全体がおかしくなった。部分最適かもしれないけれど、社会全体の最適ではない。これは里山にも当てはまります。

さらに、ヨーロッパでは複業で暮らしている方が多いんです。サブの「副」ではなくマルチの「複」業です。たいてい100~200万円くらいの収入源を4種類ほど持っておられます。例えばブドウ農家がワインを作り、宿泊、レストランもやっている。山もあるので薪も作る、これは50~100万円ほどでお母さんのお小遣いになります。一方、日本では専門化していますよね、稲作農家とか、サラリーマンならサラリーマンだけ。ここが社会構造として大きく違っています。昔は日本の中山間地域もいろいろな収入を持っていましたが、そういう社会になるべきだと思います。

これはチューリッヒの森林管理局の敷地内の写真です。中途半端な木がたくさん植わっていますね。なんだと思いますか？ そう、クリスマスツリーで、これも小金稼ぎになります。こちらの写真では、道端にたくさん薪が置いてありますが、アルコール中毒の方が社会復帰として作っているそうです。効率は悪くても、社会としてそういうことをやっているわけです。これはバイオマス、今ヨーロッパはあまり木を燃やさない方向へ行っています。



オランダでは、今、茅葺のニュータウンが最高級として流行っているんです。時代は変わっています。今はやりすぎて茅が足りなくなり中国から輸入しているという身も蓋もない状況になっているようですが（笑）。

○祭りや風習、人と人の関わりが村を繋ぎとめる

私はやはり、関わりが大切だと思っています。さきほど岸和田と八尾の話をしましたが、祭りが盛んなところは地域内でお金がちゃんと回っています。岸和田の方と話していると「仕出しは知り合いに頼むし、飲みに行くのも祭りの時に花代を出してくれたママさんのところに行く」と。相対取引が成立し、地域の経済が維持されているわけです。だから私は「地域経済のために何をしたらいいですか」と尋ねられると、「祭りだけは頑張ってください」と答えます（笑）。

新潟の北部に高根村というのがあり、地図で見てもかなりの中山間地です。ところがそこだけ人口があまり減っていないそうです。なぜかという、そこは奉納相撲がとても盛んな土地で、地元の若者がトーナメントで相撲を取り、優勝者の家に村人みんなで宴会に行く、そういう風習が残っているから。決勝ともなると双方の家でお座敷の準備ができていて、負けると大変です（笑）。村でも、こんなしんどいことをやめよう、仕出しにしようという意見もあったそうですが、それは違うだろうということで続いている。それによって村の外にお金が出ずに中でまわる。村の風習や関係性は経済にとって、とても重要なのです。

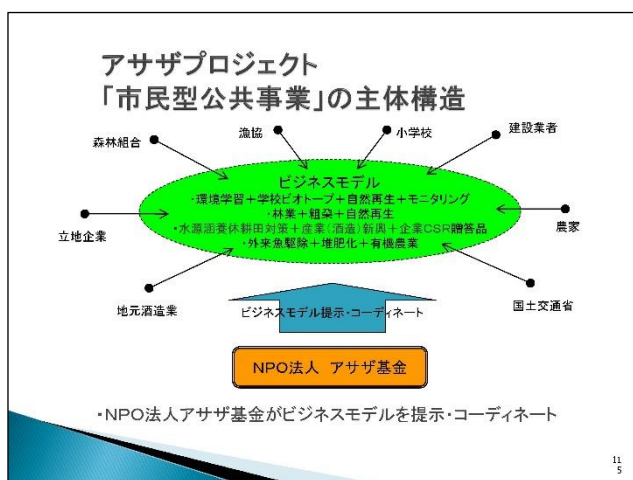
地域の自然などを本当に守っているのは学者ではありません。日々その地を見続けている地域の人です。この場合、地域の人と外部からの人が協働するベストミックスが大切です。冒頭の上山高原のエコミュージアムなどでは

このバランスをうまく取っています。

次の担い手を育てることも必要です。昔は旧制中学の生物部などが地域の専門家を輩出していました。今後はどのように人材を確保するかは結構大事だと思います。

持続可能な保全のためには、企業のSDGs活動を活用するなど知恵を絞らなければなりません。企業側もCO2排出の制限など制約が加わり、里山や生物資源と繋がりたいというニーズが高まってきています。この大きな変化を意識すべきだと思います。また、ボランティアもいいのですが、続けて行くには先程のヨーロッパの事例のように、お金の面もある程度考えていかねばならないと思います。霞ヶ浦にアサザ基金というNPOがあります。ここでは20年以上前からいろいろと知恵を絞り、いろいろなwin-winモデルを実践してこられました。例えばオーナー制度で酒米を栽培し、地元の酒屋でお酒を造って、企業の年始の挨拶用に使ってもらったりされています。

これからは鉄・コンクリート・プラスチックといったマテリアルは、今までのようには使えなくなっていくと思います。そうすると必ず「自然素材で代替」という話が出てきますが、森林資源でとても賄える量ではありません。昔のように木を伐り過ぎて禿山にしないよう、ちゃんと守っていかねばいけないと思います。最後に、このスライドは渋沢栄一さんのひ孫の渋沢寿一さんと一緒に写っています。渋沢栄一が恵まれない子どもたちに手を差し伸べるなどさまざまなことをされたように、利益配分をみんなで行なっていく精神が大事だと思っています。



これからの里山保全活動に求められること

SDGs、地域循環の視点から

地域の皆さんが中心となりながら、
どのような地域にしていくのかの**大目標を共有し**

地域資源を活かし、
化石エネルギー・マテリアル(鉄・コンクリート・プラスチック)の転換や
様々な**地域課題の解決**に

地域の脆弱性に(誰一人取り残さないよう)目配せしながら

互いに**信頼関係**を築き、助け合いながら
非経済的価値を大切にしながら取り組む

211217 徳中直樹

【事例紹介】

「河内長野市における 森林ESDの展開 南河内の森林を教育素材に」

倉橋陽子氏 (河内長野市立林業総合センターkinkonkan 森林ESD担当
鎮守の森コミュニティ研究所 特別研究員)

○新しい価値や魅力によって、地域や人間の問題を解決したい

0私の研究領域はコミュニケーションです。それも、人間と人間、人間と森林の間でなされる、言葉だけでなく、どちらかというと言語コミュニケーションの領域です。「すてきた」や「何かをしたい」といった人の気持ちの移り変わりはどういうきっかけで起こるのか、といったことを研究しています。現在は京大の広井先生による「こころの未来研究センター」という研究所内にある、地域で活動している民間の方たちによるシンクタンクでコミュニティやコミュニケーションの研究に携わっています。さらに、「そもそも人間とはなにか」という人間への興味追求をヨガ哲学の領域でもう25年ほど行っており、インド・ヴィヴェークナンド研究財団で勉強もしています。



さらに森林でヨガをしたり、資格を生かして森林セラピーを行ったりして、「人間が森林に入った時、どのように反応し、どう思うか」といった研究にも取り組んでいます。いろいろな病気の方にヨガを指導することで、どう病に向き合うかを解決する糸口にもなります。

show-tenという会社はもともと、私のバックグラウンドでもあるブランドを作るようなソフト領域の業務を行なっていましたが、現在はITや紙媒体など、問題解決のためのツールを作り、ご提供しています。このように、新しい価値や魅力によって地域や人間の問題を解決するために必要な、研究とクリエイティブの両輪で活動しています。

河内長野市には林業総合センターという市立の施設があり、林業組合が指定管理者になっています。河内長野市は7割が森林で、河内林業という産業もあります。その林業や木材について人に伝える森のサテライトとして林業総合センターは誕生し、今年で31年になります。私はその近くにある道の駅のソフト事業の立ち上げに関わり、地域を掘り起こす中で、こんなにいいものがある、と魅力を知りました。そこから繋がりが生まれ、契約して4年目です。ここでは地域や企業と関わりながら、「木のある暮らし」を通して森の楽しさ、面白さを知っていただく取り組みをしています。コンセプトとして「木を生活に取り入れる」「自分で木を使ってものづくりをする」「森林を知る」という3つの柱を作り、さまざまな実験を行って、森を学び楽しむことを追求してきた、それが森林ESDにつながっています。

鎮守の森コミュニティ研究所では、地域の単位を寺社仏閣に紐づけています。日本ではコンビニの数より寺社仏閣の方が多いのですが、この単位で祭や人の活性化、コミュニケーションを行うとバランスがいいことがわかっています。だから私もこの中でいろいろな研究を行ってきました。これらの知見を生かし、森林組合は新しい取り組みとして3つの領域「観光」「健康」「教育」に関わり始めています。これらを掛け算することで新しい価値、新しい知識を得てもらい、人を動かすきっかけにしようとしています。例えば、森でヨガ体験に参加した方が、自分のお店を改装する際、地元の材を使ってくれたことがありました。このように、森は自分たちの生活に必要なだと体で感じてもらうことで行動変容が起こったりします。

○森林ESDで、答えのない課題に「最適解」を考える力を

今日お話しするのは、この中の「教育」についてです。ESDというのは知識を得るだけでなく、体験を重視し、コミュニケーション力や問題解決に必要な資質を応用が効く形で身に付けることに注目しています。「森林の循環」はSDGsの17の目標のうち14を網羅しているので、これを体験することでさまざまな気づきがあります。例えば今、林業は丸太を売ると赤字になります。経済面でマイナスなのにどうして林業を続けるのか、を考えることで、環境や社会といった項目との関連が浮かび上がり、「最適解を出す」という答えがあることに気づいてもらうプログラムになります。これは林野庁でも推進しているものです。素材は里山でもいいのですが、河内長野では林業や森林を素材にした森林ESDを行っています。学校教育の現場では、小学校は2020年、中学校は2021年、高校は2022年から学習指導要領が変わり、「知識の習得」から「生きる力の習得」へシフトします。学びがゴールではなく、それを将来の問題解決にどう生かすかが重視されるのです。私は、先生にご説明する時、森林ESDといっても通じにくいので、「主体的、対話的で、深い学びです」と説明します。そして林業についての学習にとどまらず、今の教育が目指す視点を持ったプログラムであることを実際に先生方に体験してもらい、理解を深めていただきます。

手法としては「アクティブラーニング」です。自分でやっていく中で、内側からの面白いという感覚を大切にしています。河内長野は林業に特化しているので5年生の社会科で行っていますが、富田林市の小学校では総合学習の時間に、学科を超えた横断的体験的学習として実施しました。

新しい指導要領では地域との協働が重視されます。先生は今、プログラミングなどいろいろなことをしなければならない。それは大変だから地域に助けてもらいなさい、というわけです。現実はその簡単ではないのですが、先

生と相談しながら森林の中で、森林について、森林のために学ぶ、というさまざまな展開を心がけています。森林ESDを、森林か教育、いずれか一方からの押し付けではなく、両方の視点を持つものにするを大事にしています。

これまで実施してきた中で実感した、先生がESDプログラムでとまどわれるポイントをお伝えしましょう。まず、大人側が答えを持っているという姿勢ではなく、一緒に解決する仲間、という姿勢を持つという点です。決して馴れ合いというわけではありません。また、プログラムの目的は「答えのない問題に取り組み、解決する資質と能力を得る」ことなので、今すぐに解決できなくてもいいという前提があります。子どもたちから出てくる答えも毎回変わったりする。そういう、大人の想像の域を超える反応があることもESDの特徴です。新学習指導要領では、「体験して学ぶ」「地域と連携」「過去の学びを未来へ活かす」、この3つをポイントとして挙げているので、そこから先生の理解に繋げてもらえばいいと思います。手元にある素材をどう編集してこの指導要領のポイントに結びつけるのか、という作業になります。

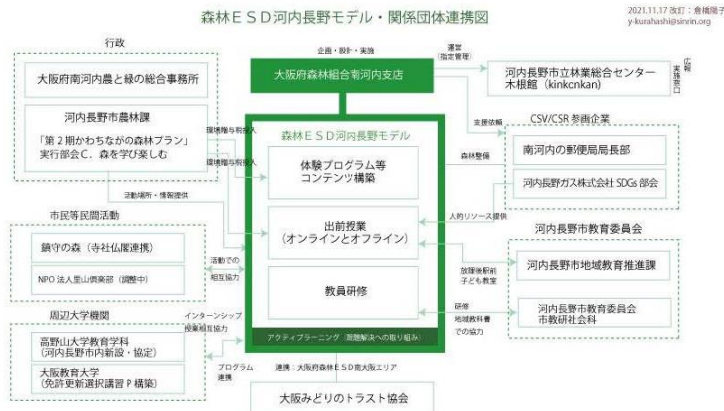
○地域の素材を組み合わせて、地域に適したプログラムを作る

河内長野は、住宅地のすぐそばに森林や里山があるので「自分ごと」にしやすく、さらに生業として河内林業があり、問題解決すべき課題も山積み、という特徴があります。これらを掛け算し、ESDに適したプログラムを作りました。では、みなさんが活動している地域にはどんな人やコミュニティ、生業があるのか。それぞれに異なる素材を組み合わせ、料理に仕上げるのがESDでは求められます。河内長野では、地域資源として河内材や森林組合があり、学校がSDGs教育をどうするか困られていたのが森林ESDを活用しました。財源は環境贈与税です。この税は国から市町村へおとりて来るもので、木材利用と森林保全と普及啓発人材育成に使える税金なのですが、木材利用でとどまっているところも多い。でも、未来のために使う税なので、地域の学校教育に使いましょうと行政と話し合い、実現しました。

なぜ学校教育にこだわったかという、**「誰一人取り残さない」**ためには私学や地域の一部ではなく、市全体の学校教育として行うことが重要だと考えたからです。プログラムは出前授業です。森から遠い学校もあるので、現場とオンラインで繋いで実施します。さらに実際に森に入る林業体験や、大阪教育大学と組んで学校の教員向けの研修も行っています。市内13校のうち、7校がプログラムを取り入れています。プログラムを実施するのは森林組合ですが、行政や南河内の郵便局局長部、ガス会社など企業にも関わってもらい、人材や資料の提供、印刷代などで支援いただいています。スターバックスさんには店舗に地元の材を使ってもらい、コーヒークラスと木材チップをブレンドした堆肥作りも行っています。地域に貢献することが企業存続にも繋がるということで実施しています。

南河内エリアだからできること 皆さんも活動エリア地の資源を生かす

<p>1 住宅エリアからほど近くに森林・里山エリアがある ＝自分事としやすい</p> <p>自然林、人工林、など題材とする森林や里山が身近にある。</p> <p>私たちが美味しく飲んでいる水は森林保全と直結している。</p> <p>防災としての森林保全。</p> <p>→子どもたちが「自分事」としてとることができる。</p>	<p>2 約70%が人工林。林業が生業として残っている ＝河内林業</p> <p>苗を植えてから約50～80年頃が出荷最盛年。植えている木、手入れしている森林は、自分のためだけでなく、子どもや孫のため。「俺の世代でやめることはできない」</p> <p>森林を育てる＝持続可能な開発。</p> <p>川上から川下までの一連の林業環境施設がそろうている。</p>	<p>3 整備が必要な森林の約68%が手つかず(現状) ＝問題解決テーマ</p> <p>1. 2を踏まえ、現状の課題も多い。問題解決のための思考、行動へ結びつく題材がある。</p> <p>わたしたちの親は？祖父母は森林を持っている？</p>
--	--	---



- 【2021年度実施目標】
- 体験プログラム：オンライン実施でも可能な体験プログラムの構築。→都市部向け、リカレント教育向けに再編集。
 - 学校教育：河内長野市小学校・放課後児童子ども教室のプログラムで出前授業（45分）（計11校）を企業連携で実施。
 - 先生研修：大阪教育大学連携、教員免許講習講座のプログラム構築（オンライン特化）
 - 森林整備：小学校が年頃少くとも40本ほどの間伐を行う。入りやすい場所を企業と連携して森林整備として広げる。
 - 民間事業：スターバックス河内長野高向店のプロジェクトを活用して、サポーターリカレント教育としての民間事業への足掛かりへ。

将来的には寺社仏閣である観心寺さんや現在では河南町のNPO里山倶楽部、大阪みどりのトラスト協会とも連携し、応援をいただくなど、ESDを維持するためいろいろな方に関わってもらっています。

私たちは子どもたちに楽しんでもらうことを一番大事にしていますが、先生に安心感を与え、一助になることもとても重要です。先生は今、本当に忙しいので、このプログラムを取り入れると先生は何もしなくていい、というくらい至れり尽くせりの内容にしています。日にちと人数さえ決めてもらえば、あとはバスの手配も私たちがやっています。このように、森林ESD河内長野モデルは、森林組合が地域の企業とともに、問題解決を根本にしながら学校を全面的にサポートするという姿勢を貫いています。そのおかげで初年度は1校の実施でしたが、翌年は3校、現在は7校と年々倍増しています。

さらに学校だけでなく、リカレント教育にも適しています。今は子どもたちの方が新しい価値観を学んでいます。そのため、むしろ私たち大人が受けてきた教育とずれが出ているので、大人の方々にも連携して行っていくことも重要だと思います。大阪市立中央図書館のプロポーザルで獲得した仕事では、建物の一部分を木質化し、それによって新しい学びの扉を開くようなワークショップのプログラム設計をしました。その様子が動画でも見られるのでぜひご覧ください。

(Hon+α! (ほな!) <https://www.youtube.com/watch?v=0TX90AXFNag>)

森林ESDのポイントは、地域の問題解決を連携して行うことです。そして答えをお膳立てするのではなく、地域の困りごとをどう解決していくかという視点でプログラムを組むことが大事です。大人の学び直しにもなり、学校現場の問題解決にも繋がります。無理なく続けるには、組合だけでなく企業や行政、学校機関などつながり、誰かがいなくてもまわる仕組みを作っていくことが必要です。これまで日本の社会はハード先行型でしたが、今ある資源をどう活用するか、どう人間に恩恵を与えるかという視点でプログラムを設計しています。ご興味があったり、うちのエリアではどんな取り組みができるのか、などのご相談があれば組合や私にご連絡いただければ、何かしらのお手伝いができると思います。

【活動紹介①】

「竹の有効活用いろいろ」

蜻蛉池公園夢の森づくり隊 (岸和田市) 小林伸一氏

私たちは2001年から岸和田市にある蜻蛉池公園「ふれあいの森」を拠点に月2回活動しています。本年度、初めてさともり協議会の竹林整備についての交付金が採択されたので、私たちが21年間どのように竹を利用してきたかについて話をします。

私たちは子ども6人、大人10人の16人で活動しています。会則の目的の項目に、子どもたちの遊びの空間づくり、会員の夢を実現する、を掲げています。活動内容にも、子ども用イベントと竹籠教室の開催を挙げています。子ども用イベントは「ファミリーメイト」と名付けて1年に5回、春夏秋冬と8月の夏休みにも実施してきました。主にサツマイモとジャガイモを植え、掘り、食べる、そして森で遊ぶことが主体です。毎回「食べる」ことを行っています。

竹については、ふれあいの森は6ヘクタール、甲子園球場の1.5倍くらいの広さがあり、そのうち0.9ヘクタールが孟宗竹、真竹、淡竹の竹林です。以前は間伐した竹を竹林内に積んで保管していたのですが、なかなか腐りません。最近は竹林の外の広場まで運び出し、枝を払って短く切り、笹と竹稈とに分けて積んでいますがそれでも腐らないので、竹をどのように利用または処分するかが最大のネックになっています。現在はこれらの竹を環境保全、子どものイベント(ファミリーメイト)、竹籠教室と3つの用途に利用しています。まず、環境保全利用について





は、会の発足当時にビオトープ池に杭を打ち、孟宗竹を並べて栈橋を作りました。この時はたくさんの竹を使うことができました。毎年4月上旬には公園の管理事務所と共催でタケノコ掘りイベントを行っています。竹の数を減らす絶好の機会ですが、それでも追いつきません。間伐した竹を集めて管理事務所にウッドチップにしてもらったこともあります。これは腐葉土としてさまざまな利用が可能です。10トンほどを竹林内の遊歩道に埋設し整備に使いましたが、これはよかったと思います。ふれあいの森の落ち葉も、かき集めて孟宗竹で作

った柵に積んでおくと2〜3年経つとよい腐葉土になります。それを自分たちが日頃作っている芋畑にすき込んでいます。今年は4人の子どもたちが自分たちで2つの竹柵を作り上げました。爪部分が20センチもある大きな熊手も自作です。一度に多くの枯葉を集めることができます。

2つ目の用途がファミリーメイトでの利用です。5月には竹パンを焼きます。当初は竹筒をまっぴたつに割り、パン生地を入れて囲炉裏にくべて焼いたのですが、このやり方では子どもたちがすることがないので、最近では竹にパン生地を自分で巻いて自分で焼く、おいしいものを作るにはどうすればいいかを自分で考え責任を持つ方法に変えました。竹ひごで虫かごを作り、持って帰って虫を育てるということもしました。これは大人も子どもも一生懸命になります。腐葉土で育ったカブトムシを入れて持って帰るのですが、400匹ほどいた幼虫のほとんどが当日までに飛んでいってしまい、持って帰れない子も出てきたのでやめてしまいました。8月は流しそうめんも大人気です。孟宗竹を切って3〜4段の樋を作り、そうめんなどを流します。コロナ禍で人を集めにくくなり、三密も避けるために、樋を家族単位で時間制で使ってもらう方法に変更。今年は自分で作ることも追加しました。



竹細工として竹馬や竹とんぼ、水鉄砲を作っています。孟宗竹の巨大水鉄砲は長さ2メートルもあり、大人が4人で押さえて4人でピストンを押す、大迫力でした。10月の秋には竹を並べた竹ゲレンデを、自分で作った竹ぞりで滑ります。使い終わった竹は遊歩道の案内柵に利用しました。冬、2月は孟宗竹をアルミ箔で包み、バームクーヘン生地を塗っては焼き、塗っては焼きして、大きく立派なバームクーヘンが出来上がります。

また、自分たちの楽しみとして竹籠づくりを行っています。竹の表面だけを竹ひごとして使うので、かなりの竹を消費することができ、竹利用に役立っています。初めの頃はひご作りが中心です。やがて四海波花籠を作れるようになっていけばいろいろな形に応用でき、2〜3年もすればかなりのものが作れるようになります。



このように、竹を管理していると間伐した竹をどう処理するかがポイントとなります。長続きする使い方では竹籠、竹柵。遊びなら単発的ではありますが、竹ゲレンデや竹ハンモックです。大人も乗れます。今年は2つ作りましたが、大人が5人がかりで作ってもかなり時間がかかります。従来型の利用法としてはチップ化が大量に消費でき、一番良いのではと思っています。私たちが農家さんから譲り受けたウッドチップパーを利用してチップ化、堆肥化し、改良材としてどう使うかが今後の課題です。

今は新しい技術として、竹を紙や布、石炭や石油に変わるプラスチックにするなど、どんどん考えられています。これが進めば日本中の竹が新たな資源になる可能性があります。当面は昔ながらの生かし方、竹籠づくりやチップにして腐葉土化するなどを自分たちで身に付けてやっていければいいと思います。

【活動紹介②】

「チョウたちと守る里山 ～三草山ゼルフイスの森 保全活動～」

能勢の里山を繋ぐ会（能勢町） 乾 栄次 氏

当会は発足一年、まだほやほやです。私自身、会長ですが、会の本当の意義をわかりかねているところです。私は大阪府能勢町の南にある三草山のふもと、上杉という地区に在住しています。子どもの頃から山に分け入って自然の実をおやつがわりにしたり、木をチャンバラごっこに使って遊ぶという生活をしてきました。今年70歳になりますが、いまだに三草山と関わりをもって活動しています。仕事は大工、アナログです。里山の木をまさに使っています。50年前、大工になった当初は国産の木がほとんどでしたが、やがて人件費の影響などにより国産の木を伐り出して使うと値段が高くつくようになったため、順番に外材に変わりました。残念なことだと思います。山にはまだ植林の木がたくさん残っているので、最近はそのを使おうという話が森林組合でも出ていますが、まだ使うまでには至っていません。



自己紹介に城好会会長とありますが、これは40年ほど前に子ども会の世話をしたメンバーの中から神社仏閣を見学する趣味のサークルがもとになった会です。三草山は兵庫と大阪の県境にあるのですが、三草山ゼルフイスの森は、30年前に地元の地権者と大阪みどりのトラスト協会が契約し、保全地区としたことから活動が始まりました。日本にいる25種類のシジミチョウのうち10種類が三草山に生息しており、1カ所でこれほどの種類が確認できるのは珍しいそうです。



このヒロオビミドリシジミは、日本における生息地域の東端が三草山です。そういうこともあり、大阪府が保全地域に指定してくれました。平成4年9月には大阪府緑地環境保全地域に指定され、チョウを含め動物の捕獲が禁止されました。この時、大阪府警が1年ほど張り付き、3件の逮捕者が出ました。それほど厳しい処置をしたおかげで最近では捕獲に来なくなりました。ヒロオビミドリシジミはシジミチョウの中でも看板娘と言われていますが、きれいな輝く緑の翅を持っているのはオスなので、看板息子ですね。

ゼルフイスとは、シジミチョウの中でもミドリシジミの仲間を指しています。成虫はナラガシワやコナラなどのブナ科の樹木の上の方で卵を生みます。卵は初夏6～7月くらいに羽化し、幼虫は新芽を食べて育ちます。私たちは月に2回ほど巡視のために山に入りますが、ほとんどチョウを見たことがありません。今は放置林で木も10メートル以上の高さになっていて、しかもシジミチョウはサイズが小さいので、木の上の方を飛んでいてもほとんどわからないのです。木を揺るなど刺激を与えると飛び立つので見ることはできます。シジミチョウの中でも灌木やスミレなどを餌にする種類もあるので、間近で観察するチャンスはあります。

チョウを保全するために、ササの縞状管理も行ってきました。チョウの中にはヒカゲチョウのようにササを好むものもいます。ゼルフイスにとってササがあった方が良いのか悪いのかを専門家の先生が研究され、いろいろな種類の蝶がいるほうが良いということで、ササを20メートルごとに刈ったり残したりを繰り返す「ゼブラ刈り」を行っていました。

里山は、シイタケの原木を採ったり炭や薪を作ったりというのが本来の目的です。このあたりでは菊炭、池田炭とも言いますが、この生産も行っています。三草山の保全地域にも炭窯の跡がたくさんあります。山で木を伐り、炭にして軽くして持って下りるということをやっていたんです。このように木を1メートル以上に高伐りし、鹿に新芽を食われないように萌芽更新させます。台木から芽がたくさんでて木が太くなります。これは台場クヌギといって、もともと能勢町の習慣です。上の木を伐り、使っていきます。その他、シードトラップでどんぐりを集め、苗木に育てて植えるということも行なっています。





また、カシノナガキクイムシがナラの木に入って木を枯らせる「ナラ枯れ」というものがあります。里山は7～10年で伐って利用するので15歳以上の木はほとんどなかったんです。でも最近は放置林となり太い木が残るようになったため、その木に虫が入り枯らせるようになりました。細い木にはほとんど被害はありません。この虫から防除するためカシノナガホイホイなどを設置していましたが、今では虫がいなくなり不要となったので撤去しています。もともと三草山自体が独立峰で、大阪湾からも三草山が見えます。灯台も地図もなかった昔は、瀬戸内を航行する船が三草山の行灯岩と呼ばれる月に照らされて輝く岩を「もうすぐ大阪だ」という目標にしていたそうです。行燈岩は大阪平野を一望できる場所にありますが、その眺めを遮る木が伸びてきたので今年の活動で伐ってハルカスも見えるようにしました。

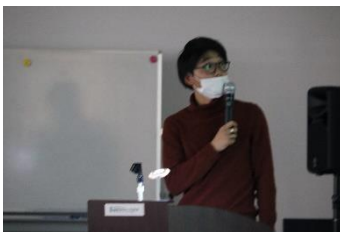
そして今やどこにでもいるニホンジカですが、私の畑も鹿が柵を倒して入り野菜を食べられました。このように里に降りているということは山にももちろんたくさんいるわけです。そこで山に防鹿柵を設置し、樹木を保全しています。また、2018年の西日本豪雨や台風で、三草山でも幅50メートル、長さ400メートルという大きな山腹崩壊がありました。谷状の登山道に水が集中し荒れてしまったので、私たちが石畳を敷き、丸太で段を作ったので歩きやすくなりました。今、37段のうちやっと2段が終わった状況です。作業のために人数が必要なので、興味のある方はお手伝いに来ていただければ助かります。

三草山のふもとには棚田百選に選ばれた長谷の棚田があります。ここには田に水を引くためのトンネル状のガマという水路が残っています。ここに三草山周辺で見られなくなったタガメを呼び戻そうと活動したり、さまざまな小動物の保全を行ったりもしています。能勢町には文化も歴史もあります。興味のある方は是非来て、見て、体験していただきたいと思います。

【活動紹介③】

「地域循環型社会への挑戦」

BAMBOO 一燦(枚方市) 久保銀次郎氏



僕たちは枚方市駅から徒歩7分くらいの「スパイス工房」というカレー屋さんの竹林整備部隊です。お客さん数名と店のスタッフという血気盛んな7人くらいの若者で構成されています。主に枚方市の東部の里山で竹林整備を行う他、農作業を手伝ったり畑で野菜を作ったりもしています。なぜカレー屋が竹林整備をするに至ったかという、オーナーと僕でカレーに使う野菜を全部自分たちで作ろうという話になり、枚方東部で畑を借りたんです。そこが竹林の横にある畑で根っこが侵入し

ていたため、竹を伐ることから作業が始まりました。大変でしたが思いのほか楽しく、また竹について調べていく中で、全国的な放置竹林や竹害の問題に直面しました。同時に、竹の可能性も感じたんです。無限に生える資源なので、それを使えたら面白いのではないかと。そこで勉強のために地区の森林ボランティア団体の活動に参加しました。これが結構大変な作業なんですけど、僕らのおじいちゃん世代の人がやっている。これは僕ら若者がやらないとあかんやろと組織を作り、交付金を申請しました。

僕らが活動しているのは枚方の東、生駒山の北端に位置していて「にほんの里100選」にも選ばれている、結構いいところです。北河内唯一の農業振興地域にもなっています。枚方市東部地区が抱える里山の荒廃という問題の原因として、これは全国的に共通していると思うので



すが、山林資源の需要低下ですね。昔は生活に必要なだったので薪を使ったりして自然と循環していたのが、そういうのがなくなり、今は山に用事がないということになっています。そして後継者の都市流出。高齢化で山をさわる人がいなくなっている。枚方市東部では「三枚地権」という特殊な地権になっていて、山の持ち主が3つに別れているんですね。1つは個人が持っている「立木支配権」、つまり立木を持つ権利。2つ目が村が持っている「下草刈り権」、これは昔でいう入会（いりあい）です。3つ目の「地権」は市が持っている地面を持つ権利、村の人が山へ入る権利。このように三重になっているんです。だから僕らも交付金の申請のための協定書を揃えましたが、通常は1枚ですよ。僕らも1枚は1枚なんですけど、承諾は3カ所に取りに行きました。そういうハードルがあって、団体が山へ入りにくくなっている理由だと肌で感じましたし、山林の問題の責任感も分散してしまっているんだなと思いました。



9月に正式な内示を受けて作業を始めました。5月に緊急事態宣言が出ていたので店を閉めてずっと山へ入って作業をしていたんです、カレーを作らずに。竹林整備が主な活動で、1.4ヘクタールくらいを管理しています。0.3ヘクタールと1.1ヘクタールに分かれていて、0.3ヘクタールの方は枯れ竹の処理が終わり、間伐に入っているところです。大阪府森林組合と繋がりができ、竹林整備のプロの方から指導を受け、技術向上を図ることもしました。また、ポーラス竹炭を土壌改良剤に使用しています。

竹を焼いて灰になる前に鎮火したら炭になります。それが多孔性といって小さな穴がたくさんあいていて、そこに微生物が住み、増える作用があるんです。これをネットで見つけたのでとりあえずやってみよう。今も使っています。カリウムやミネラルも含むので、石灰のように使って野菜を作っています。これがうちの野菜カレーです。会の構成員に介護施設に勤務している方がいるので、その方に企画してもらって流しそうめんイベントを行いました。喜んでもらえたみたいです。

竹チップについては、枚方市からレンタルしたチップperで作っています。店なので大量の生ゴミが出るんですが、それと混ぜて堆肥化しています。だからうちの店からはもう生ゴミは出なくなりました。2〜3週間で発酵して生ゴミの原型がなくなります。昨日はカレーに使う玉ねぎ1年分、約5千本分の植え付けを終わりました。飲食店なので地産地消を積極的にやっていたということで、お顔も知っている生産者の方のお米を使わせてもらっています。シーズンによって土地の野菜などを売ったりもしています。



1年間活動をして問題点が見えてきました。たいてい店の定休日に活動しているのですが、荒廃した里山を整備するには不十分なペースです。お金の面も、ボランティアでもいいのですが、せっかくバリバリ動ける若者が何人も集まったのでもっと活動したいなと思っています。1ヘクタールの放棄竹林を整備するのにプロでも140万円くらいかかるみたいで、補助金をいただけただとしても持続可能な活動とは言えないということがわかりました。それで、何か里山の活動から生まれる商品を作って売ってもっと活動資金に充てたり、活動できる日も増やしていかないといけないなと感じています。

今後の展望としては、竹林整備をしてタケノコ園を作り、タケノコを収穫して店で売ったり、来年は里山由来の商品、カレーに絡めた商品なども、店だけでなく冷凍カレーを販売するために作ったオンラインショップを使って販売しようかなと思っています。今年、少ないながらもいろいろなことを試したのですが、その経験を生かしながら商品を作ってお金を得て、売れば売れるほど僕たちが山をきれいにする時間も増えると考えています。商品の販売がお客さんに里山の問題に関わっていただける機会にもなるかと思うので、カレー屋を含めたこの組織を街と里山をつなぐ窓口にできるように来年も活動していきたいと思っています。

【質疑応答】

Q. 倉橋先生に伺います。私たちは高槻で年に1回、小学5年生に体験入山してもらっています。森を案内し木の名前を覚えてもらったり、炭窯の跡や動物の骨を観察し、森の恵みについて討議します。また、林野庁の森林機関に30センチくらいの高木の大木を伐ってもらい、さらに私どもで10センチくらいの高木を玉伐りし、皮を剥いてもらったりして1日を過ごしてもらっています。ただ、この授業が学校の都合で11月くらいから始まるのですが、森の中では花の時期や夏の方が森や木の命を感じるにはいいわけですが、しかも年1回しか来られないので、森の魅力を伝えるには時間が足りないと思います。生徒に聞くと山に入ったことのない人が半分以上です。そういう状況の中で、森林E S Dで森の命と人間の命のつながりということに感動してもらうのは大変なのですが、倉橋先生はどうお考えでしょうか？

A. (倉橋氏) 私たちも1校1学年につき丸1日しか実践できななので、限られた体験の中でどうやって魅力を出すかを考え、五感を使うプログラムを行なっています。河内長野市でも、運動会の関係などで花の少ない時期、10～1月くらいの実施が一番多いのですが、山で目を閉じて寝転んでもらい、いろいろな匂いを嗅ぐなど、ひとつずつ五感を意識してもらうことで森での感覚を研ぎ澄ましてもらうことを行います。そうすると、山の中で木を伐ったりもするのですが、子どもたちの感想として「最初は森林は怖いものだと思っていたけれど、自分たちがほっとしたりすることに役立つんだな」と。私たちはそういった言葉は特に言っていないのですが、そんなことが子どもたちの感想の中に結構入ってたりします。子どもたちが本来人間として持っているが街では閉じている五感を森で開く、という体験をプログラムに入れることで、時間や季節の不利な点を補完しています。

Q. 私たちも玉切りや皮剥ぎを五感で味わっていただくことをやってもらっていて喜んでくれますし、子どもによっては記憶に残るのですが、システムとしてはまだ弱いかなと思っているんです。

A. (倉橋氏) 作業の中で五感の体験をすると、作業に慣れていない子どもたちは、まず作業をきちんとしなければということに意識が向くので、感じているひまがないんですよ。なので、私たちは何もしない、ただ感じるだけの時間をつくっています。作業もせずただ寝転がって水の音や風の音を聞いたり。今の小学生は忙しいので、何もしない時間というのが普段はないんです。だからあえて何もしない時間を10分作るということをしています。今までやってきた中ではそれが1日で実践する中で可能なプログラムかなと思っています。

Q. 年齢層の広い団体では年代ごとのモチベーションが違うように思いますが、若い方だけの団体はどんな雰囲気ですか？

A. (BAMBOO 一燦 久保氏) もうスポーツですね、森林整備は。利用はあとから考えるのですが、段取りが決まればスポーツです。21歳の大学生がうちの一番若い構成員で、このあいだまでラグビーをしていて血が余っているの(笑)。

Q. 乾さんに伺います。私たちのところではこれからどんぐりの森をつくろうとしています。30年の台風で総倒れし、このままでは雑木しか生えてこないの、有効利用ということでどんぐり展示林というようなものを作りたいと思うのですが、方法として、鹿対策で苗を3年くらい育てて移植する、その場所に種を直蒔きして育てる、などいろいろありますが、おすすめの方法は何でしょうか？

A. (能勢の里山を繋ぐ会 乾氏) 三草山ではドングリをそのまま植えるということはまずしていません。そこで拾ったドングリを集めて、山を下りたところ、トラスト協会のいろいろな資材を置いているハウスの横に昔からの棚田があり、その一角を借りてドングリを蒔いて苗を育てています。苗が育ってきたら順番に山へ持って行って植えています。植えたらとにかく周りに網を張り、鹿よけ対策が必要です。山で育てると鹿対策が大変です。どこでもそうだと思いますが、とにかく鹿との戦いです。まず里で育てて、山へ返すということを三草山ではしています。

A. (蜻蛉池公園夢の森づくり隊 小林氏) 先程は蜻蛉池公園の竹の話をしたのですが、20年前に発足した時にどんぐりの森にしようということで、アベマキの名産地である和泉市に惣が池公園へみんなでどんぐりを拾いに行きました。どんぐりに傷をつけ、それを水苔を敷いたペットボトルに入れておくと育ちがとても早いです。底に穴を開け、枯葉がたまる溝に植え付けて枯葉でかくしておきます。すると1~2年ですぐに大きくなり、ペットボトルごと山へ運びました。森中に200本植えたのですが、ほとんどちゃんと育っています。日当たりがよい場所が一番大きく育った木は風当たりも強く、一昨年台風19号で倒れてしまいましたが。ペットボトルと水苔というのはかなりいいと思います。それから、子どものイベントとしてクヌギも植樹しました。その時は河内長野の花の文化園の大きなクヌギ、これも一番大きいのが倒れたそうですが、倒れる前に丈夫などんぐりをもってきて同じように植えました。3~4年経ちますが、3メートルから一番大きいのは6メートルくらいの高さになっています。

(司会) 蜻蛉池公園には鹿が来ないので、北摂の山と泉州の山は少し違う点があるかもしれませんが、参考にしてください。

Q. (倉橋) この中でコーヒーをベースにした堆肥づくりを経験され、何かの苗を育てたことのある方はいらっしゃいますか？ 今、コーヒーカスと木のチップで堆肥作りをやっていて、子どもたちが間伐体験をしているところに、未来の子どもたちのために苗を植え替えるということでスターバックスさんとやっているんです。いろんなところからドングリを拾ってきて、いろんなパターンでどの芽が出るかを実験しているのですが、どなたか経験があればと思ったのですが・・・いらっしゃらないようですね。

【本日のまとめ】

大阪さとり地域協議会 会長 武田義明

今日はお疲れ様でした。最初に畑中さんと倉橋さんから話題提供の講演がありましたが、かなり大きなテーマ、地球環境から里山にどうやってつなげるか、というお話がありました。SDGsやESDという言葉が出てきたと思います。持続可能な社会を作るためにどうすればいいかの目標がSDGsで、ESDはそれを実現するための教育なんですね。ですから両方をやっていかないとうまくいかないと思いますし、これを成り立たせるためには地域循環、つまりそれぞれの地域でまわっていかないとどんどん疲弊する、というお話だったと思います。里山管理を行うということは、いろいろなものを作り、そこで消費し、まわしていくことで地域循環につながっているのだと思います。里山管理は生物多様性の保全にもつながります。里山を利用することで新しい生態系が作られてきたわけです。山の木を伐り、それを利用する。山の草を刈ってそれを堆肥にして畑に入れる。そういうことが昔は行われてきたのですが、さきほどの「BAMBOO 一隣」のお話が、そういう話につながるかなと思います。



我々がやっていることは微々たるものですが、これを続けていかないと持続可能な社会が作れないだろうと思います。それを次世代に繋いでいくことを考えないといけないので、「蜻蛉池公園 夢の森づくり隊」の方々のように、子どもと一緒に体験することは重要だと思います。その点、「BAMBOO 一隣」は若い方ばかりなのでとても期待しています。

いろいろなところでいろいろな活動がなされていますが、お互いの活動を知ることも重要だと思います。連携し、人が足りなければ行って手伝おうというようなことができれば、全体がさらに発展するだろうと思います。コロナの影響で思うように活動できないと思いますが、続けていく必要があると思います。そういうことをみなさんに期待して、まとめとさせていただきます。

—以上—